

愛の独り相撲

葉軽馳

(訳 横田勤)

彼女はとても気位の高い女性で、もしそうでなかったら、三十歳になってやっと彼と結婚するようなこともなかっただろう。

もう少し若い頃は、彼女はあれこれと選り好みをしていて、結婚を求めている女性たちはもうみんなそれぞれの結婚相手を見つけて、彼女だけが最後まで残ってしまった。そしてその後に、彼に出会ったのである。

残念な思いがないわけではない。彼の背丈、体重、容貌、ひいては収入さえ彼女が少し若いころに考えていたレベルと符合していた。唯一の欠点は、彼が一度結婚したことがある、ということだ。彼女は、もし何年か早く知り合うことができているならば、この小さな「遺憾なこと」さえ感じることもさえなかっただろうと常々考えていた。

でも、考えは考えとして、この数年の経験と年齢はすでに彼女を教え諭していた。「彼というチャンスを逃すと、もしかしたらそれ以上に完璧な男性の出現は無いかもしれない」と。

それで彼らは結局連れ合いになった。結婚の登記が終わると、彼女の心の中は突然がらんとしたようで物寂しくなった。何年も恋愛の戦場へ赴いていても、最後はこんなものに過ぎないのだ。こうなると知っていれば、少し早く選んで結婚していたら、今よりも良かったのではないだろうか？

彼女を残念な思いにさせているのは、これだけではなかった。結婚後しばらくして、彼女は彼が浮気をしている形跡があるのに気づいた。ハネムーンを過ごして帰ってくるや否や、彼はすぐに、家で夕食を食べなくなった。ある時など、は真夜中の一、二時になってやっと帰って来た。部屋に入るなり服を脱いで横になり、ぐうぐうといびきをかいて熟睡し、一言の言葉もない。彼に尋ねると、毎回「仕事が忙しいから会社で残業をしている」と言う。

仲の良い友人たちの言によると、男性が遅く帰って来るのはほとんどが浮気をしている動かぬ証拠である、ということだ。このため、彼女の心の中には疑いが湧き起った。あるとき彼はまた、会社で残業をする、と言って出かけた。彼が行った後、彼女は彼の会社へ電話をかけた。呼び出し音が一回、二回鳴ったが、誰も受話器を取らない。再び彼の携帯電話にかけると、電話の向こう側で彼は、「会社のトイレにいる」と言っている。電話を置いたあと、彼女は思わず冷笑せざるを得なかった。電話の向こう側では明らかにテレビの音がしていた。もしかしたらこのとき、彼は正にどこかの女性とホテルでイチャイチャしているに違いない！

心の中にわだかまりがあったら、生活は当然のことながら平穏であるはずはない。仲の良い友人たちの言うとおりのことだ。過去に離婚経験のある男性は離婚するのに慣れているから、二回目の結婚を大事にはしないだろう。彼女は離婚のことを考えながら、一方ではまた心の中の怒りを抑制することができず、彼に対してあれこれと難癖を吹っかけた。あるときは炒め物にわざと塩を多く入れた。彼があちこちに汚れた靴下を放るのを見て、些細なことでも大げさにして、いつもかんしゃくを起こした。彼女がわざと人を困らせるようなことをするのに対して、彼はただ笑って聞き流し、ひいては関心のない態度さえ見せるので、彼女がもともと考えていた、「大喧嘩になって、それを口実に離婚に至らせる」という計画をおじゃんにした。

このころの結婚生活で、彼女は失望のどん底に落ちていた。その日の夜、彼女は一人で深夜まで残業をしていた。仕事が終わって、手を伸ばしても五本の指がはっきりとは見えないほど暗い夜の景色を見ながら、彼女は突然怖くなった。彼の携帯電話にかけても、ずっと誰も取らない。一人で、果てしない暗さに向き合っていると、突然涙が泉のように湧いてきた。

その時、すでに離婚の決心を固くしていたのだが、その後起こったことは極めて劇的だった。ちょうどその時、彼女の携帯が突然鳴り出した。うつむいてちょっと見ると、何と彼の電話番号ではないか。電話をしてきたのは彼の同僚で、会社で今晚懇親会があり、彼がお酒をたくさん飲まされて、酔って意識を失ったというのだ。彼女は急いでタクシーを拾い、彼の会社へ向かった。

会社に着くと、彼はすでに歩くこともできないほどに酔っ払っていた。彼が吐きそうになったので彼女は急いで彼を支えながら、何も考えずにすぐさま男子用

トイレへ入っていった。

そこで気が付いた。トイレの中にさえ小さなテレビが備え付けてあるとは、この会社は本当に金持ちなのだ。ここが疑惑の源になった場所であると彼女はわかった。そしてここでやっと、自分が思い違いをしていたことを理解した。

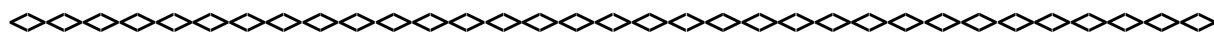
その後、彼の同僚の口から、彼女はつぎつぎと事情の真相を聞き出した。一日も早く家のローンを完済するため、彼女にいい生活をさせるため、彼は結婚した後、以前は引き受けなかった仕事を多く引き受けて、毎晩未明まで残業をしなければならなかった。同僚が彼に「体を大切にしないといけない」と忠告したことがあるが、彼はただ笑って、彼女は私に着いてきてくれただけですでに損をしている。もう彼女を苦しい目にあわすわけにいかないんだ、と言った。

その時、彼のやつれた顔を見ながら、涙の粒が彼女の目に浮かび上がり、とうとうあふれ出てきた。彼女は疑心暗鬼に陥って独り相撲をとっていたのだ。彼は彼女よりはるかに結婚と生活の真の意味を理解していて、一人の男の寛容さと我慢強さで、二人の円満な生活を作り上げようとしていた。

それでやっと、彼女はこの愛情の中で、二人が、それぞれ独り相撲をしていたのだと分かった。彼女の独り相撲は初めから終わりまで、猜疑心の影から逃れられなかった。しかし、彼の独り相撲にはずっと愛情と相手を気遣う心があり、一人で、暗い隅で、黙々と二人の幸せのために奮闘していたのだ。

その後、離婚の計画は自然と消えてしまった。彼女は毎晩、早々に会社へ行って彼を無理やり家へつれて帰り、深夜まで残業をさせないようにしている。いつも彼の平凡でまじめな姿を見ると、彼女は、生活というのはこのようなものだと考える。つまり、二人が互いに助け合ってさえいれば、ありきたりの暮らしが二人にとっては非の打ちどころのない生活になるのだ、と。

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社, 南昌市, 2013, pp. 294-296.)



她是个心气颇高的女子，若非如此，也不至于年届 30 岁才与他结婚。

早些年，她挑三拣四，直至昔日的追求者都有了各自的归属，唯独她剩到了最后。再后来，就遇见了他。不是没有遗憾他身高体重长相甚至收入都符合她早些年设下的标准，唯一的缺陷是结过一次婚。她常常想，若是能早几年认识，也许连这点小遗憾都不会有了。

不过想归想，这些年的经历和年龄早就教会了她，错过他也许不会再有更完美的男子出现了。

于是，他们最终还是牵手了。登记完，她心里突然空落落的，多年来征战情场，最终也不过如此。早知今日，当初早点挑个人嫁了，不也胜过今日吗？

令她遗憾的还不止于此。结婚没多久，她就发现他有了出轨的迹象。刚度完蜜月回来，他就经常不回家吃饭，有时到凌晨一两点才回来。一进房间，脱了衣服就躺下来，呼呼大睡，一句话也没有。问他，每次都说工作忙，在公司加班。

照闺蜜们的说法，晚归几乎是男人们出轨的铁证。为此，她心里有了猜疑。有一次，他又说去公司加班。等他走后，她便拨通了他公司的电话，一声、两声，一直没有人接。再打他的手机，电话另一头的他说自己在公司的洗手间里。放下电话，她不禁冷笑，电话另一头明显有电视的声音，说不定此刻的他正和哪个女子在宾馆里卿卿我我呢！

心中有了芥蒂，生活自然不可能风平浪静了。闺蜜们说得对，有过婚史的男人对离婚驾轻就熟，自然也不会珍惜第二次婚姻。她一边盘算着离婚的事，一边却又遏制不住心中的怒气，对他百般刁难。有时炒菜故意放多了盐；看到他随处乱扔脏袜子，她小题大做，常常大发脾气。对于她的刁难，他只是笑置之，甚至是漠然相对，令她原先设计好的大吵一架并借此离婚的构想付诸流水。

可对于这段婚姻，她实在失望透顶。那晚，她一个人加班到深夜。做完事，看着外头伸手不见五指的夜色，她突然就有了恐惧。可打他的手机，却一直无人接听。一个人对着无边的黑暗，她顿时泪如泉涌。

那一刻，本来已经铁了心离婚，可后来的事却颇富戏剧性。就在那个时候，她的手机突然响了起来，低头一看，竟然是他的号码。可接通后，却是他的同事，说公司今晚有联欢会，他被灌了很多酒，醉得不省人事。她赶紧打车到他的公司。

到了那里，他已经醉得连路都走不动了，看他想吐的样子，她赶紧扶着他，不假思索地往男卫生间里冲。

到了里面才发现，这公司当真有钱，连卫生间里都装着小电视。想起这场猜疑战的源头，她这才相信，真的是自己错了！

后来，从他同事的口中，她陆陆续续拼凑出了事情的真相。为了早日还清房贷，给她好的生活，他结婚后接了很多以前根本不会接的单子，每晚都要加班到凌晨。同事都劝过他，要爱惜身体，但他只是笑着说，她跟了我，已经亏了，不能再让她受苦。

那一刻，看着他憔悴的面孔，她的泪花在眼眶里转了几圈，最终还是落了下来。这场猜疑自始至终都是她一个人的独角戏。而他远比她更懂得婚姻和生活的真谛，以一个男人的宽容和忍让，换来两个人的完美生活。

于是，她也终于明白了，在这场爱情中，两人都在上演着各自的独角戏。她的独角戏自始至终都脱不了猜忌的影子；而他的独角戏却始终与爱有关，一个人在黯淡的角落中默默为两人的幸福而奋斗。

再后来，离婚计划自然胎死腹中。她每晚都早早去公司押他回家，不再让他加班到深夜。每次看着他平凡而认真的笑容，她想，生活也许就是这样，只要两个人相濡以沫，再平淡的日子，也是属于两个人的完美生活。

